

メカニカルヒーリングを生み出す 時の錬金術師たち

永遠にピンクゴールド調のケースカラーが変化せず、身につけることでヒーリング効果を与える銅を主体とした新合金「キューブラム479」。スイス独自の伝統療法師が生み出したこのレシピは、サステナビリティを第一とする高級時計の本質に、最も適した素材かもしれない。設計や仕上げに盛り込まれた伝統的な超絶技巧とともに、その成り立ちを探ってみたい。

ALCHEMISTS

Cu 29

銅を主成分とする新合金で、ケースと主要なムーブメントパーツを構成するヒーリングウォッチ。ホメオパシー由来の癒やし効果だけでなく、7Nに相当するピンクゴールド調の色味が半永久的に維持される。古式に則ったムーブメントパーツの造形美は、独立時計師フィリップ・デュフォーの薫陶を受けたもの。手巻き (Cal.AC003)。51石。2万1600振動/時。パワーリザーブ約72時間。キューブラム479 (直径44mm、厚さ15.4mm)。19万8800CHF〜。



右の写真は、ヴォー州ル・サンティエ(ジュウ渓谷)にある独立時計師フィリップ・デュフォーの工房前。中央の人物がこのプロジェクトを強力に推し進めたファブリス・テューラー。向かって左が、アルケミストの時計師/設計士を務めるエルヴェ・シュルシュター。デュフォーはアルケミストのアドバイザー役として、シュルシュターに自分の技術を伝授し、設計や仕上げにも改良を加えた。左の写真は、伝統療法師として名高いデニ・ヴィブレの診療室。彼がキューブラム479の発案者だ。

高級時計に求められるマテリアルの特性とは何か？近年ではあらゆる種類の新素材が高級時計のケースとして用いられているが、開発の方向性はふたつに絞られている。ひとつは素材としての強さや、それに伴う軽量化などを追求するエクストリームな性能。そしてもうひとつは、素材表面の硬さ(耐傷性)に由来する価値の永続性。つまりサステイナブルな性能である。後者の特性には素材自体の安定度も含まれ、18Kゴールドに微量のプラチナを混入することで酸化を抑制するようなオリジナルレシピも数多い。もしここに極めて酸化に強く、永遠にピンクゴールド調の色味が変化しない金属があったとしたら？そんな夢の新合金を生み出した錬金術師が、気鋭の独立系ブランド「アルケミスト」だ。

彼らのファーストモデルとなる「Cu 29」は「キューブラム479」と名付けられた独自の合金でケースと主要なムーブメントパーツを作り、大気圏をイメージしたサファイアクリスタル製のオートモスフィアガラスですっぽりと覆う。ムーブメントのキャラクター性を決定付ける、受けやレバー、コハゼなどの造形美は、伝統技法に則った昔ながらのハンドメイドフィニッシュによる。

これほど超絶技巧の限りを尽くしながらも、そのコンセプトの根幹は、ヒーリングなのだという。

アルケミストの主要メンバーは3人。まずプロジェクトを主導するのはジュラ州セイネレジェで丸棒切削を専門に手掛けてきた巨大サプライヤーのボス、ファ



デニ・ヴィブレの左手にある小さな痣のような点。この手の感覚でキューブラム479のレシピを発見した。なおテューラーとの共同開発はこれが2度目で、最初の成果は果物から抽出された100%の純水だ。

トード・ムティエの工場長を約7年にわたって務め、ボヴェが誇る、天体3部作のうち、最初の2作を設計したのがシュルシュターである。テューラー自身、彼の存在は古くから知っていたようだが、招聘することはとても叶わないと思っていたようだ。しかし初めてコンタクトを取った17年初頭、ちょうどボヴェを辞してフリーランスとなっていたのだ。アルケミストに合流したシュルシュターは、瞬く間に基礎設計をまとめて上げる。「ファブリスと出会ってからアイデアが溢れて眠れない」と語るように、アルケミストの初作として用意されたプランは、なんと3部作。ロンチモデルとなるCu29のキャリア・ナンバーが「AC003」となっているのは、最もシンプルなる3番目のプランから発表するという戦略だ。それでもケース全体とムーブメントパーツのほとんどにキュープラム479を用い、シンプルながらも古典機然とした風格を漂わせている。しかし話はここで終わらない。シュルシュターは完成した設計プランを持って、独立時計師フィリップ・デュフォーの門を叩いたのである。設計終了が18年4月。その年の12月にはデュフォーの工房に迎え入れられている。シュルシュターは全てを手作りしたかったと言うが、もっと直接的に「製作を手伝ってもらおうと思った」とも語っている。なかなかの怖いもの知らずだ。

しかしデュフォーの側は、そんなシュルシュターの率直さを憎からず思っているようで「エルヴェのペビーをふたりで育てた」と語る。実際、Cu29の設計や仕上げには、デュフォーによる手直しが多岐にわたって盛り込まれているようだ。「技術を教えてくれと言って訪れる人は多いが、自分の設計を持参したのは彼が初めて。さらに私に手伝えと言った。ならば彼には、私と同じ技法を習得してもらうしかない。時計学校の1年生のように工具作りから始めたよ。設計や仕上げを変更した部分も多い。設計や技術に、完璧のさらに上を求めたのです」

「バゼルワールドの会期に合わせて発表を予定していたため、プロトタイプにかけられる時間は約4カ月。その間シュルシュターは、デュフォーの工房に通い詰めて、技術を積み上げていった。「フィリップの工房で働く」とは、フェデラーにテニスをするのと同じ。同じ道具を使っても、同じ結果は得られない。とにかく技術に対して謙虚になるしかない。例えば面取りひとつにしても、フィリップは面を見せることだと言っています。45度のカットでは、ひとつのアンクルしか光が入らないが、面に丸みがあると光が動いて見えるんです。でもそのやり方をフィリップは、いつも簡単そうに言うんですよ。こうやってちょいちょいやって」

デュフォー自身、昔の技法はどうだったのかと常に自問自答を繰り返している。19世紀の風になって、工房の屋根裏からすべてを見たいというのは、彼の口癖からの口癖だ。そんなデュフォーも、組み上がったCu29の仕上がりに「N.O.T.O.O.B.A.D.」のお墨付きを与えた。これはデュフォー独特の言い方で「結構イイ線いってるね」という讃辞だ。シュルシュターはデュフォーに弟子入りする際に、ひとつの約束を交わしている。教を請うかわりに、自分がその技術を伝えてゆくことだ。現在シュルシュターは、セイネレジェにある工房で直伝の技を駆使しながら、それを後進たちに伝えている。

ALCHEMISTS

組み立て中のCu29。ムスターシュ状にデザインされた古典的なコハゼや、背の高いバランスブリッジで支持されるシリンドラヘアスプリングが見える。キュープラム479製の地板は、ジャーマンシルバーや18Kゴールドの190Hvに対して、硬さが160Hv程度。これは真鍮と同程度で、加工特性は変わらないという。



(右)デュフォーの工房で集中トレーニングを受けるエルヴェ・シュルシュター。ボヴェの工場長まで務めた彼をして、デュフォーの技術の前にはただ謙遜するばかりだろう。(右中/左中)セイネレジェにあるスイス・ファイネスト内に設けられた工房で作業に当たる時計師たち。白衣はデュフォーが好んで用いる歯科医師用のもの。シュルシュターはここでデュフォー直伝の技を実践し、後進たちの指導にも当たっている。(左)デニ・ヴィブレの原案に基づいて製造されたキュープラム479の母材。切削加工もスイス・ファイネストで行われる。

いい結果が出る時には手が熱くなるという。その科学的な根拠の是非は置くとし、ヨーロッパ独自のホメオパシー(同質療法)の現場で古くから用いられてきた金、銀、銅を細かなボール状にして混ぜ合わせていたところ、彼の手が急に熱くなった。何かを感じ取ったテューラーは、そのまま素材メーカーに持ち込み、合金にして化学分析を行ったところ、驚くべき結果が出た。銅を主成分とするピンクゴールド調の新合金は、18Kゴールドをはるかに上回る耐酸化特性を示したのである。テューラーがすぐさま特許を取得したことは言うまでもない。

ホメオパシー由来の素材を用いて磁気療法師が決定したレシピだけに、肌に触れているだけで癒やしの効果が得られる。しかもそれは、サステナビリティーを化学的に証明された素材なのだ。テューラーはこの時、スイス時計産業の体質に少し疲れていたというが、これを使ってみよう一度時計を作ろうという情熱を呼び起こさせるほど、この素材は画期的だった。しかし時計師ではない彼が新しい設計を生み出すためには、3人目の錬金術師が必要だった。白羽の矢が立ったのは、ボヴェの開発部門(デミエ)で黄金の玉座にいたエルヴェ・シュルシュターだ。

彼が時計師/設計士としてアルケミストに合流したのは2017年8月。シャ

ケース全体に用いられたキュープラム479以上に目を惹くのが、彼らがアトモスフィアシェイブ(大気圏)と呼ぶサファイアクリスタル製の風防。巻き真が貫通しているだけでなく、その稜線をピークとして、バックケース側には絞り加工が施されている。かなりの難加工が予想されるパーツだ。ケース裏側は、錬金術的な記号が彫り込まれたキュープラム479のソリッドバック。肌に触れる面積をできるだけ増やし、ヒーリング効果を高めるためのデザインだ。

